



**Data**

監督 : ケヴィン・マクドナルド  
 出演 : ラッセル・クロウ / ベン・アフレック / レイチェル・マクアダムス / ロビン・ライト・ベン / ジェイソン・ベイトマン / ジェフ・ダニエルズ / マリア・セイヤー / ヘレン・ミレン

## 👁️👁️ みどころ

日本では政官財の癒着が大問題だが、米国ではプラス軍の癒着？国防総省の一部事業の民営化。そう聞いて群がってくる民間軍事関連企業とは？ハリウッドは娯楽大作ばかりではなく、良心作ここにあり！そんな熱い思いが伝わってくる、社会派エンタメ作品は必見！もっとも、こんな新聞記者の取材方法が真似されたら大変だが、そこは映画と割り切り、取材のあり方と新聞社のあり方をじっくりと考えたい。



## 東宝の株価がなぜ低迷？

私は松竹、東映、オーエス、テアトルの株式をたくさん(?)、そして東宝の株式を少し長期保有していたが、2008年10月以降の世界的金融危機による株価暴落の中、いわゆる「ナンピン買い」で、「これが底!」「これが底!」と考えて東宝の株を次々と購入した。東宝の株価はオーエスやテアトルとは1ケタ違うからその金額はかなりのものだが、『崖の上のポニョ』(08年)の大ヒットをはじめ興行収入においてはここ数年「東宝の1人勝ち」が続いていた(ちなみに松竹は、『おくりびと』(08年)の凱旋興行によって、30億円だった興行収入が60億円を越えたため、従来の赤字から一転して黒字になった)。したがって、東宝の株価はいくら何でもそんなに落ちるはずがないと思って買い続けたのだが、今なお私が購入した価格には回復していない。

そんな状況下、2009年6月1日東宝から大量の株主優待券が送付されてきた。松竹、東映、オーエス、テアトルは株価が安いから株主優待券はかなり価値があるが、東宝は株価が高いから1000株につき1枚の優待券をもらっても、その価値は小さい。しかし、必見作でありながらたまたま試写を見逃していた本作を、この優待券が届いたことによっ

て観ようという気になったから、優待券の到着に感謝。

しかし、それにしてもこんなに業績良好な東宝の株価がなぜ低迷？1日も早くその株価が上昇トレンドに乗ることを期待したいものだが・・・。

## こんな主人公のキャラは、フィクションとして

本作の主人公は、2001年にアカデミー賞主演男優賞を受賞した『グラディエーター』（00年）の他、『インサイダー』（99年）『ビューティフルマインド』（01年）『シンデレラマン』（05年）『アメリカンギャングスター』（07年）等でそれぞれキャラ豊かな主人公を見事に演じてきた名優ラッセル・クロウ演ずる、ワシントン・グローブ紙の新聞記者カル・マカフリー。

映画冒頭に発生する殺人事件の被害者である黒人少年スタッグの取材のために刑事に絡んでいくカル・マカフリーの姿をみていると、「これぞ敏腕記者！」の面目躍如たるものが一目瞭然。昔は日本にもこんな敏腕記者がたくさんいたはずだが、いわゆる「記者クラブ制」に馴れ、画一的なぶら下がり取材をすることに馴れてしまった今ドキの新聞記者は、カルのようなあらゆる手練手管を使った取材なんてとてもムリ？本作が面白いのは、いくら大きなネタとはいえ、カルが平気で(?)違法スレスレ(いや明らかに違法な)調査をしたり、「お前の名前を出してもいいのか！」と脅迫じみた(いや明白な脅迫)言動で事実を聞き出していること。いくら敏腕記者でも、こりゃ新聞記者としての倫理や道徳を逸脱した明らかな違法取材だから、こんなことは現実にはありえないはずだ。

したがって、とりわけ新聞記者志望の若者が本作をみるについては、あくまでラッセル・クロウが演ずる本作の主人公カル・マカフリーのキャラはフィクションとしてみるのが肝要。また、現役の新聞記者諸君は万が一にも「俺もスクープを！」とはやって、カルと同じような違法取材をしないように。

## 政治家の仕事は大変

アメリカでは戦後だけでもジョン・F・ケネディ(第35代)、ビル・クリントン(第42代)そしてバラク・オバマ(第44代)と40歳代の若き大統領が次々と登場するが、日本では40歳代の総理大臣の登場はまずムリ？本作でベン・アフレックが演ずるアメリカ合衆国連邦議会議員スティーヴン・コリンズは第2のケネディ、第2のオバマと考えられている若手の逸材らしい。彼は今、国防総省の一部の事業を民営化する公聴会で委員長を務めているが、その業務の受託を狙う民間軍事企業であるポイント・コープ社と激しく対立していた。さて、それはなぜ？それが本作の1つの焦点だ。

日本では現在、鳩山邦夫総務大臣が日本郵政株式会社の西川善文社長と激しく対立し、来るべき6月の株主総会で西川氏の代表取締役再任を拒否する姿勢を打ち出している。わかりやすく考えれば、本作のコリンズとポイント・コープ社との対立もこれとよく似たようなもの？他方、歯に衣着せぬ物言いで、『たかじんのそこまで言って委員会』にもよく登場していた、麻生太郎首相の盟友である元官房副長官鴻池祥肇氏は、愛人とのお忍び旅行がバレて、ほぼ政治生命が断たれてしまったようだ。間の悪いことに、たまたまその時期

が政府が新型インフルエンザ対策に取り組んでいる最中だったことと、おカネをケチって（？）JRの議員パスを使用したことが致命傷。愛人の存在やお忍び旅行くらいなら大目にみてもらえても、そこまで危機管理能力が欠如しては、官房副長官はもとより国会議員にとどまることも到底ムリ？

## コリンズ議員も、脇が甘い？

ある早朝地下鉄の駅で、コリンズ議員の元で働く聡明で美しい女性ソニア・ベーカー（マリア・セイヤー）の死亡事件が発生。コリンズがこれを当日開催された公聴会で1番に係者に報告したのは、ソニア・ベーカーが公聴会の仕事で大きな役割を果たしていたから当然だ。しかし、多くのカメラの前で涙を見せるとは、いくら何でもコリンズ議員は脇が甘い。

大阪府の橋下徹知事が、2008年4月17日に行われた市町村長との意見交換会の席で、涙目になりながら「今の公務員組織は人件費が高すぎる。人が多すぎる。一度一緒になって考えてもらって…」と訴えたことに賛否両論の意見が噴出したように、政治家の涙は思わぬ波紋を呼ぶことがある。

しかして、コリンズがここで見せた涙は、コリンズとソニア・ベーカーが愛人関係にあったことを露骨に推察させるもの？ 全米のマスコミがそう判断したのは当然だ。こりゃ大変。将来の大統領候補といえども、こんな愛人スキャンダルが発生すればその政治生命は？

## 政治家の逃げ場は？

公人としての職務を全うしている政治家には基本的に「逃げ場」がないのが当然。したがって、「雲隠れ」が上手な（？）民主党の小沢一郎元代表は稀有な例外。

今日まで順風満帆に国民的人気を集めてきたコリンズ議員にとって今回は最初のつまずきだから、マスコミの追及から逃れる場所がなかったらしい。そこでコリンズが飛び込んだのが、大学時代の親友だったカルの部屋。コリンズ議員の周りには大勢のスタッフがいるから、その手配によって「雲隠れ」させた方が安全で、コリンズが護衛もつけないまま1人で動いてカルの部屋を訪れたりすると、余計ヤバいのは自明の理。しかし、そうやってしまえば本作の基本構成が成り立たなくなってしまうから、そこは大目にみてあげよう。

## 3人の関係には深いウラが？

大学時代の親友が、1人は政治家に、1人は新聞記者に、という構図はエリート大学ならいくらでもありうる話。本作が面白いのは、コリンズの浮気発覚後、破綻状態になってしまったらしい美しい妻アン・コリンズ（ロビン・ライト・ベン）が実は過去カルに好意を寄せていたということ。コリンズの浮気が発覚しても、政治家の妻として記者会見は毅然と！そしてまた、離婚は絶対ダメ！そんなプレッシャーと闘いながら、アンが心の悩みをカルに打ち明けていくうち、いつしかアンの心の中にはあの時の熱い思いが？するとカルは？

そりゃいくら何でもヤバイが、そんな三角関係を基盤とした(?)カルとコリンズとの友情は、真相究明の中で少しずつ明らかになっていくあっと驚く事実関係の中、いかなる展開を? 3人の間にあるそんな深い「ウラ」を感じとりながら、あなたも一緒にスリリングな真相究明の展開を楽しもう。

## 米国では政官財の癒着プラス、軍の癒着?

日本では田中角栄を代表とする自民党政治における政官財の癒着が大問題だが、軍事に莫大な国家予算をかけているアメリカでは、それに軍がプラスされる。国防総省の一部事業を民営化ないし民間に委託することになれば、そこにたくさんの民間軍事関連企業が立候補してくるのは当然だ。そこで動くのが、アメリカでは官と財をつなぐ政治家やロビイストたち。

本作を鑑賞するにあたっては、それくらいの政治の世界における常識は頭に入れておく必要がある。

## 政官財軍の癒着と殺人事件との関連は?

それを前提に本作が描くのは、ポイント・コープ社への国防総省の一部事業委託をめぐる政官財軍の癒着構造と、冒頭に発生した黒人少年殺人事件、それに続くソニア・ベーカーの死亡事件との関連性。つまり焦点は、ソニア・ベーカーの死亡はコリンズ議員との愛人関係に疲れた挙げ句の自殺?それとも殺人事件?かということ。そしてまた、第1事件と第2事件の関連性は?ということだ。警察も当初2つの事件は何の関連性もないものとして調べていたが、カルが黒人少年の検死現場で勝手に(違法に)少年の携帯電話の着信履歴をメモした結果、何とこの黒人少年がソニア・ベーカーに電話をかけていたことが判明したからカルはビックリ。こりゃ一体何を意味するの?真相はわからないものの、2つの殺人事件が関連していることは明らかだ。

さあここから始まる敏腕記者カルの怒濤の推理と、それを裏づけていく力強い調査力、取材力はじっくりとあなた自身の目で。

## 新米女性記者に注目!

本作のメインキャストは、ラッセル・クロウとベン・アフレックという男の2枚看板。しかし本作には男女平等の国アメリカらしく、死亡したコリンズの愛人ソニア・ベーカーとコリンズの妻アン以外にも2人の重要な女性キャラが登場するので、彼女たちにも注目!まず1人目は、カルの相棒として真相究明に走り回る新米女性記者デラ・フライ(レイチェル・マクアダムス)。デラは、新米記者ながら今ワシントン・グローブ紙のWEB版で国会についてのブログを担当していたが、これは彼女がキャメロン編集局長に気に入られたため。つまり下手すると、カルの書いたクソ難しい記事よりデラの書いたWEB記事の方が若者には多く読まれるわけだ。

カルはそんなデラと口もきいたことがなかったが、ソニア・ベーカーの死亡に関してデ

ラがカルの意見を聞きにきたところから奇妙な接点が生まれることに。そして以降、新聞記者の先輩後輩としての節度をきっちり守りながら2人は急接近し(?)それが同志的結末にまで強化されるから、そこに注目!

ところで、本作はもっぱら仕事人間としてのカルを描いているから、カルの身上や家庭生活は一切描かれていない。しかし、カルが聖人君子でないことは明らかだから、アンと不倫関係になることをしっかり回避し、デラとも社内恋愛にも至らないカルには、一体どこでどんな女性関係が?

## 女編集局長にも注目! 新聞社にも時代の波が

もう1人の注目すべき女性は、ワシントン・グローブ紙の女編集局長キャメロン・リン(ヘレン・ミレン)。会社の吸収合併=いわゆるM&Aはここ数年間で急速に進んだが、2008年の秋以降世界的金融危機が広がる中、投資ファンドの怪しさが一気に明らかになってきた。新聞やテレビ・ラジオというマスコミを誰がどのように握り、どのように経営するのは国のあり方にも影響を及ぼす大問題。日本では、国の関与が大きいNHKのあり方と対比した民間のマスコミのあり方は非常に難しい問題だ。

本作でみるところ、カルは昔気質の叩き上げの新聞記者だし、編集局長のキャメロンも雰囲気的にはカルと同じ。しかし、ワシントンの老舗新聞社だったワシントン・グローブ紙は近年の新聞離れ傾向の中で経営陣が入れ替わり、現在は大手メディア会社のメディア・コープ社の傘下となっているらしい。つまり手っとり早くいえば、メディア・コープ社の資金力の前に乗っ取られたわけだ。そうすると、編集局長といえども自由な編集ができず、親会社の意向を伺わなければいけないのは当然だ。しかして、親会社のメディア・コープ社が目指したのは骨のある記事満載の新聞ではなく、売れる新聞。そうすると、今カルが命懸けで取材している2人の殺人事件に絡んだ巨大な国家利権という構図の解明記

事はこの次で、コリンズ議員のゴシップ記事が優先されるの?もちろんカルの気持ちを理解しているキャメロン編集局長はギリギリまでカルの取材を承認し協力してくれたが、親会社の最終命令が下されればそれに従わなければならないのは当然。

残された時間は数時間。さてワシントン・グローブ紙の朝刊は、カルが書いた世紀のスクープでそのヘッドライン(見出し)を飾ることができるのだろうか?

2009(平成21)年6月3日記



2009 Universal Studios and International Film Production Stella-del-Sud Fourth GmbH & Co.KG.All Rights Reserved.

2009 Universal Studios. All Rights Reserved.

『消されたヘッドライン』  
セルDVD 3,990円(税込)  
セルBlu-ray 4,935円(税込)  
発売・販売:ジエノン・エンターテインメント